

「印象」はどこから来るか：物理的属性と性格印象の関連性の検討

作田由衣子

生活文化学科

Where the “impressions” come from?:

An analysis of relationships between physical features and personality impressions

Yuiko SAKUTA

Department of Human Sciences and Arts, Jissen Women's University

People form multi-sensory impressions, such as “warm-cold” or “soft-hard,” about various stimuli, including human faces and other objects. In recent years, studies on social cognition have found that when a person looks at a face, he or she makes an instant impression judgment, and that perceived impression is used as a clue for action in various social situations. Moreover, many studies on perception have demonstrated that even simple shapes produce various impressions in the same way. However, there is little integration between the two lines of study. The current study focuses on the commonality of impressions formed from faces and simple shapes. The purpose of this study was to examine the effects of the eyes on forming impressions about visual stimuli because the eyes are important for reading emotion. It is possible that we feel “lifelike” just by attaching eyes on a simple shape, whose personality impressions would change greatly depending on whether it had eyes or not. Impression evaluation by the semantic differential method was carried out for a total of eight stimuli, which consisted of four shapes with eyes and four shapes without eyes created by manipulating two factors, namely straight/curved and regular/irregular. The results suggest that there are some differences in impressions between the shapes with eyes and the ones without eyes.

Keywords : Impressions (印象), shape (図形), symbolism (象徴性), lifelike (生き物らしさ),
Semantic Differential method (SD法)

1. 背景と目的

印象とは何だろうか。人は人物や色、音楽、香りなど様々な対象に対して、「温かみがある」「柔らかい」など、多感覚的な印象を知覚する。印象についての研究は古くから数多く行われてきたが、人物に対する印象と人物以外の対象に対する印象とは、それぞれ別の文脈から検討されてきた。人物に対する印象は、社会心理学の印象形成や特性推論という文脈から主に検討されてきた。一方、人物以外の対象に対する印象は、それが具象物であるのか抽象的な形状や単語であるのかなどによっても研究背景は異なるが、大きく感性認知の枠組みからとらえることができると考える。本稿ではまず、図形などの印象についての研究と人物印象についての研究をそれぞれ概観し、両者を合わせた研究の方向性を模索する。

1-1. 図形などの印象について

図形の印象については、様々な角度から研究されてい

る。特に日本では Semantic Differential 法（以下 SD 法 : Osgood, Suci, & Tannenbaum, 1957）を用いて印象を測定する研究が盛んに行われてきた。

SD 法は複数の形容語対を使用して印象評価を行う手法であり、図形や顔などの視覚刺激のみならず、単語、音、香りなど様々な刺激に対して適用され、人の感じている印象について感覚モダリティを超えて包括的にとらえることができるというメリットがある。また、SD 法を使用して様々な対象の印象を評定したデータに対して因子分析と組み合わせることにより、多面的で複雑な印象を 3~4 つほどの少数の次元で表現することができる。Osgood ら（1957）は、国や文化、刺激属性などを超えて共通して活動性、力量性、評価性の 3 つの軸が抽出されると主張している。

大山らは数々の研究において、SD 法を用いて印象や象徴性の分析を行っている（例えば Oyama, Yamada, & Iwasawa, 1998）。その中で、単純な図形や色などからで

も国や文化を超えて共通する印象や象徴性（幸福、孤独など）の判断がなされることを示した。

作田・行場（2003）はSD法と再認実験を組み合わせて、顔と名刺の印象の一致・不一致が再認容易性に及ぼす影響について検討した。その結果、印象の違いにより、記憶に異なる影響を及ぼすことが示唆された。なお、後続の研究（Sakuta & Gyoba, 2006）により、色と形の組み合わせでも同様の結果が確認され、印象の組み合わせが記憶に及ぼす影響は刺激固有でなくより一般化されることが示された。

一方、SD法以外のアプローチを用いた図形の印象知覚に関連する研究も行われている。たとえばとげとげした形と鋭い音や、丸みのある形と柔らかい音が連合するように、特定の音と形が対応して感じられるという「音象徴」という現象がある。Kohler（1929）により発見され、国や文化、年齢を超えた共通性が見られることが報告されている。Ramachandranらはこれを「ブーバキキ効果」と命名し、言語の原初的な発達と関連するのではないかと考察している（Ramachandran & Hubbard, 2001）。

また、人は物体に対して素早く快・不快などの評価を行う。そうした評価は物理的特性に基づくと考えられるが、詳細はよくわかっていない。Barらは、図形の輪郭の鋭さは脅威の感覚と結びつくため、ネガティブバイアスを引き起こすと仮定し一連の実験を行った（Bar & Neta, 2006）。結果はこの仮説と一致した。視覚物体の持つ輪郭の形が鋭いか丸いかはその物体への態度に大きく影響することが示唆された。

Kurosuらは3DCGにより作成された新奇物体の印象評価について分析し、評価に一貫性があることを示したが、顔の印象と比較すると評価者間での判断の類似性は低かった（Kurosu & Todorov, 2017）。特定の形と評価についてのみ、評価者間での判断の類似が見られた。

以上のように、無意味であるはずの図形に対しても、人は何らかの印象や象徴性を知覚し、その印象はある程度共有されるものであることがわかっている。

1-2. 人物印象について

上記のような無意味図形だけでなく、人は顔からも同様に自動的にその人の印象を感じ取るが、中には信頼感のような内面に踏み込むものもある。そうした研究は、社会心理学の自発的特性推論という文脈で行われてきた（たとえばUleman, Newman, & Moskowitz, 1996）。従来の研究では特性語やエピソード文から人物の人格印象を形成させる手法がとられていたが、近年は顔画像を提示して印象判断させる研究が盛んに行われている。しかし、それらが実際に人物の特性を推測していることになって

いるのかは疑問の余地があると考えられる。

一つの可能性として、顔画像の持つ物理的情報から知覚された印象も図形などの印象判断と同様に扱っている可能性がある。つまり人物特性というよりもっと初期の知覚レベルで生じているものではないと考えられる。以下にその根拠を挙げる。

まず、顔画像を見ている時間が非常に短くても、印象を処理している可能性が指摘されている（Todorov, Pakrashi, & Oosterhof, 2009; Willis & Todorov, 2006）。顔を提示して0.1秒での印象判断は、それ以上長く提示しての印象判断と内容が変わらないことが示された。したがって、そのような印象は意識的に判断されるというよりも無意識的・自動的に知覚されているのではないかと考えられる。

さらに、生後1年未満の乳児でも大人から見て信頼感が高いと判断された顔と低いと判断された顔を区別している可能性が示唆されている（Jessen & Grossmann, 2016; Sakuta, Kanazawa, & Yamaguchi, 2018）。したがって、顔からの印象判断には高度な社会的相互作用や対人経験、複雑な認知的処理は必ずしも必要ではないことが推測される。

最後に、見た目から判断された性格印象はその人物の性格そのものを正しく推測できるわけではないこともいくつかの研究で指摘されている（Todorov, Funk, & Olivola, 2015）。

以上の研究を踏まえて考えると、顔を見て「優しそう」「信頼できそう」などと感じる印象というのは、その人物の特性を推測していると思われているが、実は意識的判断や推論というよりもっと低次の知覚的レベルで生じている可能性がある。

つまり、顔の印象とは、人物の内面的特性を推測しているというよりも、低次の物理的情報から「柔らかい」「角ばった」などの物理的印象を知覚し、それらを人格特性に帰属しているのではないだろうか。暗黙の人格観や、観相学、類型論などもそれに類した考え方と考えられる。本研究では、以上の考えのもと、印象評価実験を行うこととした。

1-3. 本研究の目的

本研究では、物理的特徴から知覚される「柔らかい」「角ばった」などの印象が実際に人物の特性に結び付けられるのかを検討するため、様々な印象を喚起させる図形を作成し、それらの図形から生じる印象を分析することとした。さらに本研究では、図形をただの図形として見る場合と、人格を有していそうなキャラクターとして見る場合と比較を行った。キャラクターに見えるようにするため、図形に「目」を付与することとした。

風間 (2019) は図形に目を付与して目の有無による印象の比較を行った。その結果、評価性の高い図形では目があるほうが価値評価が高いなど、目の有無により、様々な印象の差異が見られた。しかし、目がついた図形は性格に関連する印象判断がしやすいという仮説や物理的形状から喚起される物理印象と内面まで踏み込む性格印象の関連については直接検討されていない。

もし顔からの印象判断が顔の物理的な形状によるものでしかないなら、顔のような図形に対しても顔と同じように印象判断が行われるのではないかと考えられる。たとえば丸みのある図形は角ばった図形よりも優しい印象を喚起し、顔についても同様に丸顔は角ばった顔に比べて優しい印象を喚起するとすれば、その「優しい」という印象は人物の性格として推測されたものではなく、物理的特徴から直接喚起された知覚に基づくものであると考えられる。本研究では、図形の持つ物理特徴の中でも曲線性・直線性が印象に及ぼす影響を検討することとした。物理的情報から直接喚起される印象が人格特性に帰属される可能性についても検討した。

2. 方法

2-1. 実験参加者

正常な視力を持つ 30 名の大学生 (男性 10 名、女性 21 名) が実験に参加した。平均年齢は 20.37 歳 (SD : 1.3) であった。

2-2. 刺激

Sakuta & Gyoba (2006) で使用された図形刺激の中で、[直線・曲線] × [規則的・不規則] の 2 つの要因を操作して作成されたものの中から 4 個選定した。それ

ぞれの図形に「目」に見える円を付けたものを作成し、計 8 個の刺激を使用した (図 1)。

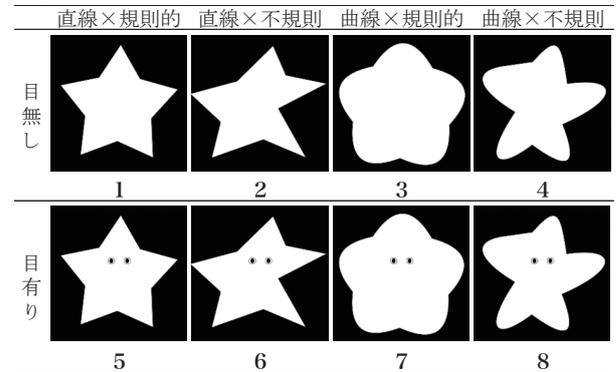


図 1 使用した刺激 (図形の下に数字は刺激番号を示す)

2-3. 手続き

SD 法による印象評価を行った。使用した形容語対は計 11 項目 (両極 7 段階尺度) であった。その中で、図形の印象判断に典型的に用いられるものは 7 項目 (Sakuta & Gyoba, 2006)、人物の性格印象を表すものは 4 項目 (Fiske, Cuddy, & Glick, 2007; Oosterhof & Todorov, 2009)、それぞれ先行研究より選定された。使用した形容語対は表 1 に記載した。評定は Google フォームを用いて評定者ペースで行われた。

3. 結果

3-1. 目の有無による印象の比較 (t 検定)

印象評定値について、刺激ごとに平均値を算出した。同一形状で目有り・無し間 (刺激番号 1 vs 5、2 vs 6、3 vs 7、4 vs 8) でそれぞれ t 検定により各項目における評

表 1 印象評価項目一覧および t 検定結果の概要

	直線×規則的				直線×不規則				曲線×規則的				曲線×不規則			
	平均評定値		t検定結果		平均評定値		t検定結果		平均評定値		t検定結果		平均評定値		t検定結果	
図形印象	目無し	目有り	t	p	目無し	目有り	t	p	目無し	目有り	t	p	目無し	目有り	t	p
活発でない-活発な	5.13	4.13	2.20	.04 *	4.67	4.70	.09	.93	3.37	3.07	.92	.36	5.03	4.97	.21	.84
動的な-静的な	4.00	4.20	.39	.70	2.47	3.10	1.98	.06 †	4.77	4.77	.00	1.00	2.70	2.63	.25	.81
かたい-柔らかい	2.37	2.33	.12	.91	3.27	2.80	1.44	.16	6.30	5.90	1.62	.12	5.97	5.37	2.47	.02 *
丸い-角ばった	5.93	6.23	1.47	.15	6.00	6.00	.00	1.00	1.67	1.93	.97	.34	2.23	2.33	.65	.52
女性的な-男性的な	4.27	4.83	1.90	.07 †	4.97	4.90	.30	.77	1.73	2.63	3.73	.00 **	3.33	3.62	.67	.51
好きな-嫌いな	2.87	4.57	4.33	.00 **	5.27	5.33	.22	.83	3.17	4.33	2.91	.01 **	4.40	5.10	2.30	.03 *
品のある-品のない	4.63	4.67	.11	.92	6.20	5.40	4.25	.00 **	3.43	4.43	3.34	.00 **	5.40	5.40	.00	1.00
性格印象																
信頼できる-信頼できない	3.90	4.57	2.08	.05	5.80	5.67	.68	.50	3.50	4.55	2.55	.02 *	5.31	5.43	.89	.38
力強い-弱々しい	2.47	3.87	3.92	.00 **	3.77	4.14	.61	.54	5.27	4.67	2.76	.01 **	5.10	4.83	1.31	.20
温かい-冷たい	3.80	5.33	3.63	.00 **	4.57	5.20	2.10	.04 *	2.10	3.23	3.32	.00 **	3.37	3.80	1.61	.12
有能そう-無能そう	3.53	4.00	1.78	.08 †	5.63	5.23	2.05	.05 *	3.60	4.60	2.74	.01 **	5.23	5.20	.18	.86

** : p < .01, * : p < .05, † : p < .10

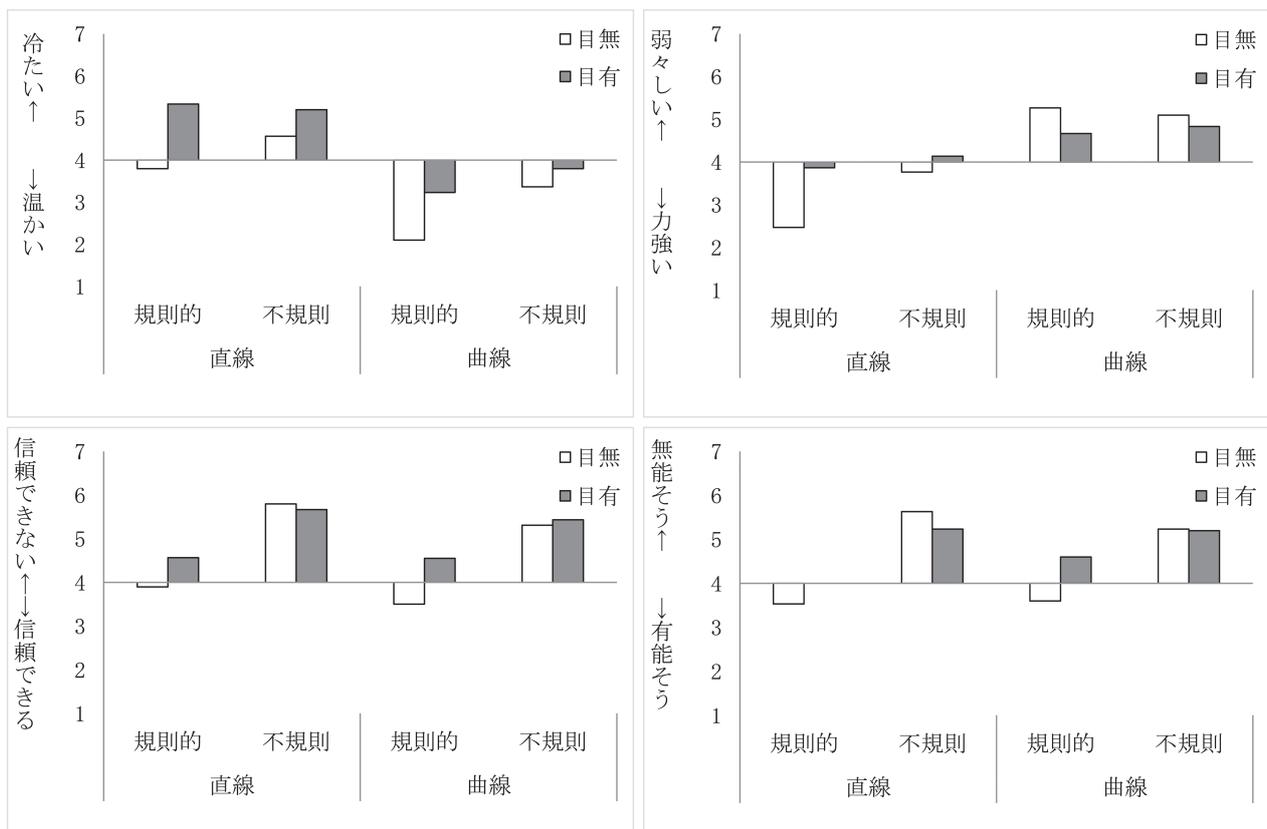


図2 性格印象の平均評定値

定平均値の比較を行った。その結果を要約したものを表1に示す。

まとめると、特に直線で規則的な刺激 (1 vs 5)、曲線で規則的な刺激 (3 vs 7) は多くの項目で目の有無による印象変化が確認された。特に3 vs 7においては、性格印象の4項目いずれも有意差が見られた [信頼できる - 信頼できない $t(30) = 2.55, p < .05$; 力強い - 弱々しい $t(30) = 2.76, p < .01$; 温かい - 冷たい $t(30) = 3.32, p < .01$; 有能そう - 無能そう $t(30) = 2.74, p < .01$]。

3-2. 物理特性の操作による性格印象への影響の検討 (分散分析)

性格印象4項目それぞれの平均評定値を図2に示す。刺激の物理特性が性格印象に及ぼす影響を検討するため、性格印象4項目それぞれの印象評定値について、[直線・曲線] × [規則的・不規則] × [目有り・目無し] の3要因分散分析を行った。以下、目の有無に関連する結果に焦点を当てて記述する。

「温かい - 冷たい」を従属変数として分析を行ったところ、直線・曲線、規則・不規則、目の有無の主効果 ($F(1,29) = 100.89, p < .01$; $F(1,29) = 13.25, p < .01$; $F(1,29) = 16.85, p < .01$) および直線・曲線 × 規則・不規則、規則・不規則 × 目の有無の交互作用がそれぞれ有意であった ($F(1,29) = 7.17, p < .05$; $F(1,29) = 12.03, p < .01$)。規則・

不規則 × 目の有無の交互作用について単純主効果の検定を行ったところ、目がある場合は規則的な図形より不規則な図形の方が温かいと評価されたが ($F(1,58) = 24.61, p < .01$)、目がない場合は有意差が見られなかった。規則的な図形も不規則な図形も目がある方が冷たいと評価された。

「力強い - 弱々しい」を従属変数として同様に分析を行ったところ、直線・曲線の主効果 ($F(1,29) = 79.62, p < .01$) および直線・曲線 × 規則・不規則 × 目の有無の交互作用がそれぞれ有意であった ($F(1,29) = 6.58, p < .05$)。交互作用について単純交互作用の検定を行ったところ、目があるとき直線・曲線 × 規則・不規則の交互作用が有意であり ($F(1,58) = 24.61, p < .01$)、規則的な図形において直線・曲線 × 目の有無の交互作用が有意であり ($F(1,58) = 21.92, p < .01$)、直線的な図形において規則・不規則 × 目の有無の交互作用が有意であった ($F(1,58) = 9.75, p < .01$)。直線的で規則的な図形は目がない方が力強く、曲線的で規則的な図形は目がない方が弱々しい印象であった。

「信頼できる - 信頼できない」を従属変数として分析を行ったところ、直線・曲線、規則・不規則の主効果 ($F(1,29) = 5.08, p < .05$; $F(1,29) = 57.98, p < .01$) および規則・不規則 × 目の有無の交互作用がそれぞれ有意であった ($F(1,29) = 8.27, p < .01$)。規則・不規則 × 目の有

無の交互作用について単純主効果の検定を行ったところ、規則的な図形において目の有無による差が見られた ($F(1,58) = 9.97, p < .01$)。規則的な図形では目がある方が信頼できないと評価された。

「有能そう - 無能そう」を従属変数として分析を行ったところ、規則・不規則の主効果 ($F(1,29) = 48.37, p < .01$) および直線・曲線×規則・不規則、規則・不規則×目の有無の交互作用がそれぞれ有意であった ($F(1,29) = 8.58, p < .05$; $F(1,29) = 14.63, p < .01$)。規則・不規則×目の有無の交互作用について単純主効果の検定を行ったところ、規則的な図形において目の有無による差が見られた ($F(1,58) = 13.14, p < .01$)。規則的な図形では目がある方が無能そうと評価された。

3-3. 図形の印象と性格印象の関連性の検討 (重回帰分析)

最後に、もし物理的情報から直接喚起される印象が人格特性に帰属されるとしたら、物理印象から人物の性格印象を予測できるのではないかと考え、物理印象を説明変数、性格印象を目的変数とした重回帰分析を行うこととした。

まず、物理印象 7 項目について主成分法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ 3 因子が抽出され、Osgood らにならって「力量性」(因子負荷量が高い形容語対: 丸い - 角ばった、かたい - 柔らかい、女性的な - 男性的な)・「活動性」(活発でない - 活発な、動的な - 静的な)・「評価性」(好きな - 嫌いな、品のある - 品のない)と命名した。因子間相関は .18 ~ .23 と低いものであった。各因子得点を算出し、この後の重回帰分析に使用した。

「温かい - 冷たい」を目的変数、力量性・活動性・評価性を説明変数として重回帰分析を行ったところ、調整済み決定係数は有意 ($Adj. R^2 = .51, p = .00$) であり、力量性 ($\beta = .56, p = .00$)、活動性 ($\beta = -.22, p = .00$)、評価性 ($\beta = .38, p = .00$) の標準化偏回帰係数がいずれも有意であった。

「力強い - 弱々しい」を目的変数として同様の重回帰分析を行ったところ、調整済み決定係数は有意 ($Adj. R^2 = .32, p = .00$) であり、力量性 ($\beta = -.52, p = .00$)、活動性 ($\beta = -.18, p = .00$)、評価性 ($\beta = .21, p = .00$) の標準化偏回帰係数がそれぞれ有意であった。

「信頼できる - 信頼できない」を目的変数として同様の重回帰分析を行ったところ、調整済み決定係数は有意 ($Adj. R^2 = .52, p = .00$) であり、評価性 ($\beta = .73, p = .00$) の標準化偏回帰係数のみ有意であった。

「有能そう - 無能そう」を目的変数として同様の重回帰分析を行ったところ、調整済み決定係数は有意 ($Adj.$

$R^2 = .36, p = .00$) であり、力量性 ($\beta = -.16, p = .00$) と評価性 ($\beta = .62, p = .00$) の標準化偏回帰係数がそれぞれ有意であった。

4. 考察

本研究では、単純な図形刺激を用いて、目の有無による印象の変化を検討した。その結果、目をつけることで印象が変化すること、特に物理印象よりも性格印象の方がより変化する傾向にあることが示された。したがって、目を付けることにより、単なる図形としてでなく、顔のようなものとみなして人格を推測している可能性があると考えられる。

ただし、目を付けると全体的に評定値が 4 に近づく傾向が見られたが、これは予測とは異なるものであった。また、刺激番号 2 と 6 以外は目を付けることでより「嫌い」評価に、4 と 8 以外は目を付けることでより「冷たい」評価になった。これらの結果からは、必ずしも目を付けることで性格に関する印象判断がしやすくなることも、性格印象がポジティブに評価されるとも言えないと考えられる。

このような結果をもたらした原因の一つとしては、目の形やサイズという点が考えられる。今回使用した目の画像は、刺激図形に違和感なく載せることを重視したためやや小さめのものであった。顔として考えると、小さな目は比較的ネガティブな印象を喚起させる可能性がある。したがって、図形の面積に対する目のサイズを相対的に大きいものにすれば、よりポジティブな印象が喚起される可能性は大きいと考えられる。

次に、重回帰分析の結果より、4 つの性格印象はいずれも物理印象から有意に予測できることが示された。したがって、物理的情報から受け取られた印象が性格印象に帰属されている可能性が示唆された。今回使用した刺激は単純な無意味図形のみであるため、今後はさらに生態学的妥当性の高い刺激を用いた検討を行うことにより、今回得られた知見を補強することができる考える。

本研究では、人の顔から自動的に知覚される性格印象と単純な無意味図形から知覚される物理的印象について統合的に理解することを目指し検討を行った。単純な図形からでも様々な性格に関連する印象が知覚されること、また、目を付与することで印象が変化することが確認された。ただし、目を付けたことにより期待とは逆に「冷たい」などのネガティブな印象が強調された。今回は 1 種類の目の画像のみを使用した。目の形やサイズを変えることで、人の顔と同様に印象にバリエーションを付けることができるのではないかと考えられる。図形に適切に目を付与することで親しみやすさ等のポジティブ

ブな印象が生じるなら、アバターやマスコットキャラクターなどに応用すれば、コミュニケーションを円滑にする上でも役立つと考えられる。

付記

本稿は2018年日本感性福祉学会第18回大会で発表されたデータを元に加筆したものである。

参考文献

- Bar, M., & Neta, M. (2006). Humans prefer curved visual objects. *Psychological science*, *17*(8), 645-648. <https://doi.org/10.1111/j.1467-9280.2006.01759.x>
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., & Glick, P. (2007). Universal dimensions of social cognition: warmth and competence. *Trends in Cognitive Sciences*, *11*(2), 77-83. <https://doi.org/10.1016/j.tics.2006.11.005>
- Jessen, S., & Grossmann, T. (2016). Neural and behavioral evidence for infants' sensitivity to the trustworthiness of faces. *Journal of Cognitive Neuroscience*, *28*(11), 1728-1736. https://doi.org/10.1162/jocn_a_00999
- 風間みのり (2019) 生き物らしさの有無で図形の印象が異なるのか. 実践女子大学平成30年度卒業論文
- Kohler, W. (1929). *Gestalt psychology, an introduction to new concepts in modern psychology*. New York: Liveright.
- Kurosu, A., & Todorov, A. (2017). The shape of novel objects contributes to shared impressions. *Journal of Vision*, *17*(13). <https://doi.org/10.1167/17.13.14>
- Oosterhof, N. N., & Todorov, A. (2009). The functional basis of face evaluation. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, *171*(1-3), 1024-1031. <https://doi.org/10.1016/j.jhazmat.2009.06.118>
- Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, P. H. (1957). *The measurement of meaning*. Oxford, England: University Illinois Press.
- Oyama, T., Yamada, H., & Iwasawa, H. (1998). Synesthetic tendencies as the basis of sensory symbolism: A review of a series of experiments by means of semantic differential. *Psychologia*, *41*, 203-215.
- Ramachandran, V. S., & Hubbard, E. M. (2001). Synaesthesia-A Window Into Perception, Thought and Language. *Journal of Consciousness Studies*, *8*(12), 3-34.
- 作田由衣子・行場次朗 (2003). 顔と名刺の印象と記憶容易性. *イメージ心理学研究*, *1*, 73-80.
- Sakuta, Y., & Gyoba J. (2006). Affective impressions and memorability of color-form combinations. *The Journal of general psychology*, *133*, 191-207. <https://doi.org/10.3200/GENP.133.2.191-207>
- Sakuta, Y., Kanazawa, S., & Yamaguchi, M. K. (2018). Infants prefer a trustworthy person: An early sign of social cognition in infants. *PLoS ONE*, *13*(9), e0203541. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0203541>
- Todorov, A., Funk, F., & Olivola, C. Y. (2015). Response to Bonnefon et al.: Limited “kernels of truth” in facial inferences. *Trends in Cognitive Sciences*, *19*(8), 422-423. <https://doi.org/10.1016/j.tics.2015.05.013>
- Todorov, A., Pakrashi, M., & Oosterhof, N. N. (2009). Evaluating Faces on Trustworthiness. *Social Cognition*, *27*(6), 813-833. <https://doi.org/10.1196/annals.1440.012>
- Uleman, J. S., Newman, L. S., & Moskowitz, G. B. (1996). People as Flexible Interpreters: Evidence and Issues from Spontaneous Trait Inference. *Advances in Experimental Social Psychology*, *28*(C), 211-279. [https://doi.org/10.1016/S0065-2601\(08\)60239-7](https://doi.org/10.1016/S0065-2601(08)60239-7)
- Willis, J., & Todorov, A. (2006). First impressions: Making up your mind after a 100-ms exposure to a face. *Psychological Science*, *17*(7), 592-598. <https://doi.org/10.1111/j.1467-9280.2006.01750.x>

(2019年12月5日受理)

和文抄録

人は様々な対象に対して、「温かい - 冷たい」「柔らかい - 硬い」など、多感覚的な印象を知覚する。近年、社会的認知の研究において、人は顔を見ると一瞬のうちに印象判断を行うことや、そうして知覚された印象は様々な社会的場面において行動の手がかりとして用いられることなどが分かっている。また、単純な図形などを見ただけでも、同様に様々な印象を知覚することは古くから多くの知覚研究により実証されている。しかし、両者の研究を統合したものはほとんど見られない。本研究では、顔と単純な形それぞれから知覚される印象の共通性に焦点を当てる。特に、顔の中でも感情の読み取りなどにおいて重要な目に着目して、視覚刺激の印象判断における目の効果を検討した。単純な形に目がついただけで、「生き物らしさ」が感じられ、特に性格印象が目の有無により大きく変化するのではないかと考えた。直線・曲線×規則的・不規則の2つの要因を操作して作成された図形刺激4個に目を付与したものとしていないもの計8刺激に対してSD法による印象評価を行った。その結果、目がある場合とない場合で様々な印象に違いが生じることが示唆された。